

この人を訪ねて

8
インタビュー

神林 龍さん

Ryo Kambayashi



第58回エコノミスト賞受賞に際して

● Profile

1972年生まれ。一橋大学経済研究所教授。専門は労働経済学。2000年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士（経済学）。東京都立大学助教授、一橋大学経済研究所准教授などを経て、2015年より現職。著書：『正規の世界・非正規の世界——現代日本労働経済学の基本問題』（慶應義塾大学出版会、2017年）など。

学界の関心、世間の関心

—エコノミスト賞の受賞、おめでとうございます。

神林 ありがとうございます。受賞できたことを光栄に思っております。また、こういう賞をいただいて注目してもらえるのはありがたいことです。

というのも、本書の執筆の動機のひとつに、経済学が研究者の世界で閉じられたものになっているのではないかと、という危機感のようなものがあつたからです。以前は、学界で考えられていることと、政策担当者や政治家、一般企業の社員が考えていることは、多少の違いはあっても、互いに理解できる範囲にあつたと思います。それがいまは、ずいぶん離れてきちゃったなと感じていました。

—かつては学界の関心と世間の関心が同じだったということでしょうか。

神林 そうですね。マクロを中心に。いまは、学界ではミクロの因果推論に力点が置かれるので、研究者が面白い

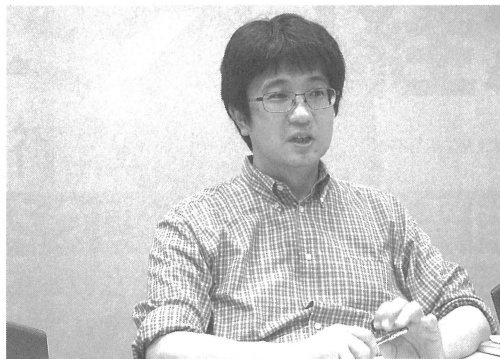
と思っていることと、世間の人が必要だと思っ
ていることがずれてしまっていると感じていました。
研究者は自分たちの関心を優先しますので、世間
で知りたいと思われていることについての説明は
二の次でしかありません。研究者が社会におもね
る必要はありませんが、さすがにバランスという
ものもあるでしょう。「研究者はそんなことばかり
やっているわけではない」と示すことも自分の
仕事のうちだろうと思ったわけです。

幸い、本書は専門家だけではなく、一般の人にも
買っていただいていると聞いており、嬉しく思
っています。

研究を振り返って

—受賞作『正規の世界・非正規の世界』を書かれた
経緯について教えていただけますか。

神林 構想自体は、ちょうど大学院を出た20年前
からずっと練っていました。研究をまとめて本に
しようと、少しずつ書いてはいたものの、どうも
まとまりがなく、あまりうまくいわずに時間が過
ぎてしまっていました。本にする以上は、1本の
ストーリーを通して、これまでの研究をまとめた
かったのですが、自分の研究のやり方が「書き散
らす」やり方でしたので、出来た論文をばちんと



バインドしただけでは、まったく意味の通じない本になってしまいます。自分がなぜそんなことを知りたかったのかを、きちんと考える必要があったということでしょうね。

— こだわりや、苦労された点がありますか。

神林 常々、「本を作るのだったら丁寧に作りたい」と編集者の方には言っていました。それを受け入れてもらえて、ページ数を削らずにすみましたし、表紙でもわがままを聞いていただきました。編集者の方には感謝の言葉もありません。

20年分の論文をまとめたものなので、なにぶん長く、頭から直して行って最後まできても、そのときにはすでに何年か経っていて、また始めから見直すことになりました。修正したい箇所が見つかる資料やデータから調べ直すことになるので、それも時間がかかります。そういった修正作業には苦労しました。

— 今回の本は研究の一区切りとのことですが、今後の研究のご関心はどのようなものでしょうか。

神林 本書と直接関係するのは、自営業の研究です。「なぜ日本の自営業は衰退したのか」、「今後、復活することはあるのか」といったことを考えていると思っています。それから、労働契約と一般の売買契約の違いを研究しています。これは法哲学と関係してくるテーマで、オーソドックスな労働経済学からは離れたものですね。

そのほかにも、たとえば職業紹介や不動産仲介などの仲介に関する研究、生産性向上のためのマネジメントのあり方についての実態調査など、やっぱりまとまりがありませんが、いくつかのテーマで研究をしています。

学界の「いま」

神林 私がいる一橋大学の経済研究所では、いろいろな学問分野の人と話す機会があり、刺激を受けています。いまの経済学は、社会科学の中では他の学問を圧倒しているような顔をしているものの、いつまで続くか、不安に思うこともあります。その前に丁寧に土台をつくる必要があるでしょう。

たとえば、いま出た法哲学なんかは歴史が長いこともあって、経済学よりも優れた業績を積み上げてきたところもあると思います。経済学で考えるようなことは、すでにだいたい考えられているといってよいかもしれませんね。

— 哲学的な基礎が足りていないということですか。

神林 そうかもしれませんが、哲学的な基礎が足りていないというよりは、わからないことを理解するようなチャレンジをしていないということかもしれません。たとえば、わたしたちは論文を書くときに、結論が見えていることについて書く傾向があるのではないのでしょうか。ほぼ筋道が見えていることについて、データを集めて確認できても、それはそれで意味はあるのですが、学問的に意義のある問いを立ててそれを研究する態度とは見ている方向が違います。

その点では最近の若い研究者はだいぶ変わってきたと思います。最初からビッグ・イシューにチャレンジしていて、うらやましいやら頼もしいやら、後生畏るべしですよ。ただ、労働経済学に関しては、そうした若手を十分に引き付けることができているかもしれません。昔は、労働経済学を専門にしているのはトップレベルの研究者と相場が決まっていました。ところが、自分たちの世代の責任でもあるのですが、いまは産業組織論なんかに取り残られてしまっているように感じます。そういう意味でも、研究者が審査員であるエコノミスト賞を労働分野の書籍で受賞できたことは、こういう仕事の仕方もある程度認めていただけたと思いますし、ありがたいですね。

[収録日：2018年6月6日]